

体育学部出身の小学校教諭の生活科教育に関する資質・能力の現状について ～教員養成課程 生活科教育の方法等の改善に向けて～

Current level of qualification and ability of elementary school teachers who graduated from the Department of Sport and Physical Education to teach Living Environment Studies

藤井 千恵子, 池田 延行

Chieko FUJII and Nobuyuki IKEDA

I. 研究の目的

昨年度の研究では理科についての調査結果を分析・考察した。今年度は同調査による生活科の調査結果の分析・考察を行う。この結果から、担当する教科教育法「生活」の講義内容についての改善を図り、次年度のシラバスに生かす。また、新学習指導要領についての内容及びコアカリキュラムの内容も含めたシラバスを工夫する。

II. 研究の方法及び内容

- (1) アンケート調査による卒業生の現状及び生活科の指導に関する状況
- (2) アンケート調査の結果の分析
生活科についての分掌の実態、指導方法や指導内容等について分析を行う。
- (3) 今後の教科教育法生活の講義内容の改善を検討

III. アンケート調査について

- (1) 目的 生活科教育の現状と課題を把握し、教科教育法生活の講義を改善する。
- (2) 対象及び人数 体育学部こどもスポーツ教育学科を卒業し小学校教員となった者
- (3) 実施時期 平成28年10月から11月まで
- (4) 回収 67名から回答(回収率66%)

IV. 調査結果とその分析

(1) 卒業生の現状について

①生活科を指導したことがある卒業生について
67名の卒業生中35名が低学年を担当したことがあると回答している。これは、全体の52%に当たる。生活科は低学年のみの教科であるため、低学年の担任とならなければ生活科の指導を行うことはない。約半数は生活科の指導経験がないことが分かる。

これは、生活科の一般的な課題でもある。ベテランの教員でも初めて生活科の指導を行うことも珍しくない。また、各区市町村の教員の研究組織に

においても生活科部会に所属する教員の数は少なく、生活科の研究内容が深まらない状況と一致する。

②校務分掌における生活科の担当について

校務分掌の総数における生活科分掌の割合は5.4%である。一方、体育は23.6%となっており、生活科を担当したことがある割合は少ないことが分かる。体育学部卒業であることにより、専門を生かす視点から体育の教科を担当することが多くなっていると考えられる。

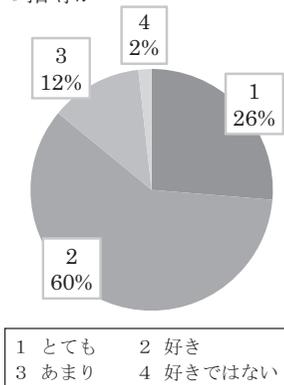
生活科の研修の受講についても、一度も生活科の研修を受けていない割合は73%におよぶ。52%の卒業生が低学年を担当しているにもかかわらず研修を受けていない割合が高い。研修の機会は限られていることや専門の体育に力を入れるため、生活科の研修まで手が回らないことが推察される。

(2) 生活科の教科指導について

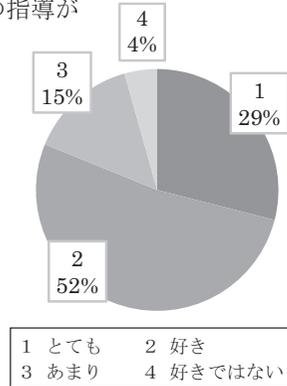
①教科や指導内容の指導が好きかどうか

理科と生活科の指導について、好きかどうかという質問では、図1と図2からは大きな違いはみられなかった。いずれの教科とも8割以上の卒業生が好きととらえている。生活科については、9つの指導内容の項目それぞれについて好きかどうかを質問したところ、いずれの内容についても5割近くが好きと回答している。なかでも「成長」に関する内容が好きと回答した数値がもっとも多くなっている。

①生活科の指導が好き



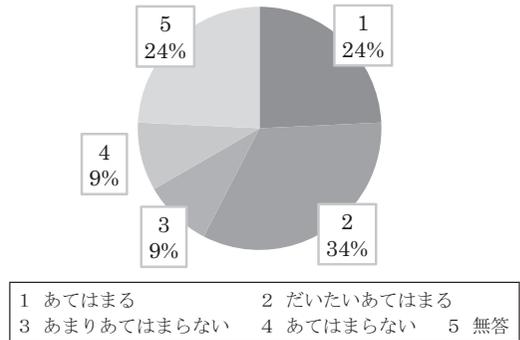
②理科の指導が好き



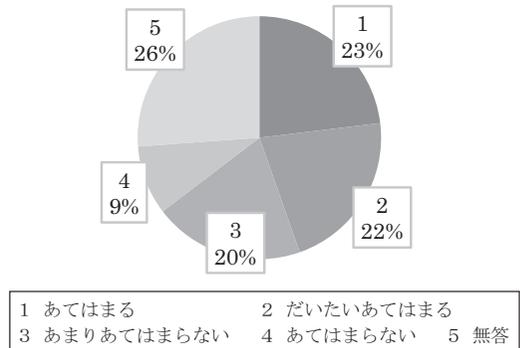
②指導内容への取組について

生活科においては、実際に飼育・栽培を行った、地域に出て児童の実態にふさわしい教材を選択したりすることが重要である。それらの項目についてどのように取り組んでいるか質問した結果は以下のグラフの通りである。

③飼育栽培を積極的に取り入れている



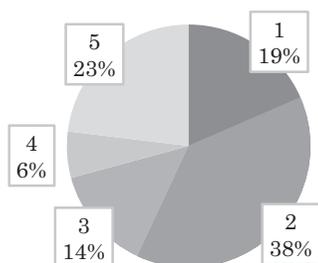
④地域教材を積極的に取り入れている



飼育・栽培については、6割近い卒業生が取り組んでいるが、地域教材の取り入れについては、5割に満たない状況である。地域教材を取り入れるためにどのような手段が求められるのかが不明であることや地域差が大きく取り入れるべき教材を見つけ出すことができないなどの要因が考えられる。また、いずれの調査に共通していることは25%前後の者が無回答となっていることである。これは、生活科を担当したことがないからである。

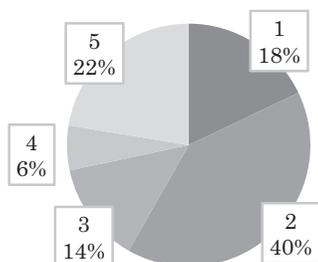
以下の4項目は、授業をどのようにとらえて指導しているかを問うたものである。生活科に限らずどの教科でも大切にすべき内容である。いずれも6割を超えた回答となっており、「主体的・対話的で深い学び」につながる授業づくりに努めていることがうかがえる。

⑤問題意識を高める工夫



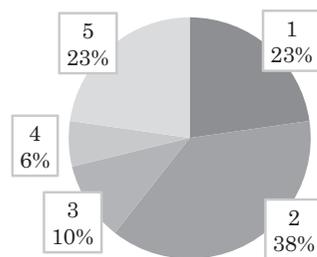
1 あてはまる 2 だいたいあてはまる
 3 あまりあてはまらない 4 あてはまらない 5 無答

⑥考えさせることを大事にしている



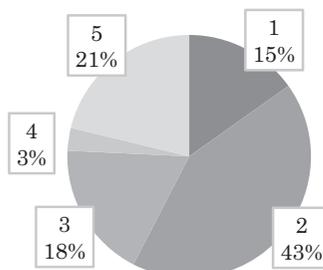
1 あてはまる 2 だいたいあてはまる
 3 あまりあてはまらない 4 あてはまらない 5 無答

⑦調べたり話し合ったりする活動を多くしている



1 あてはまる 2 だいたいあてはまる
 3 あまりあてはまらない 4 あてはまらない 5 無答

⑧日常生活に役立つよう働きかけている

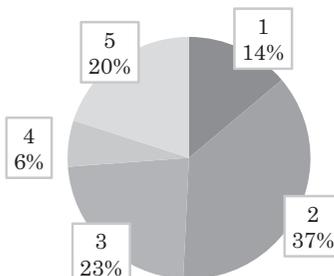


1 あてはまる 2 だいたいあてはまる
 3 あまりあてはまらない 4 あてはまらない 5 無答

③校内の指導体制について

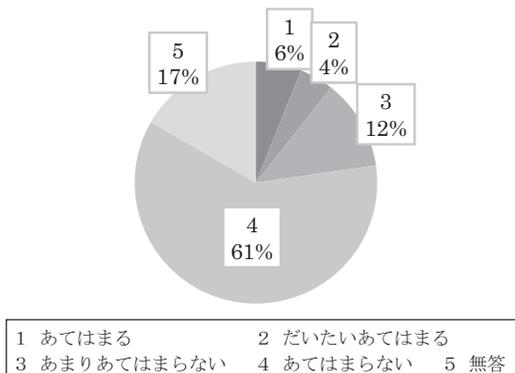
生活科は低学年だけの教科のため学校全体として組織的に取り組むことが難しい教科である。協力的な指導体制をとっているか、校内研究の対象となっているか、という二つの質問についての回答は以下の通りである。

⑨協力的な指導体制



1 あてはまる 2 だいたいあてはまる
 3 あまりあてはまらない 4 あてはまらない 5 無答

⑩校内研究の対象となっている



校内研究を実施している学校は1割であり、全く実施していない学校は6割となっている。無回答者を合わせると8割近い数値になり、校内研究を通して生活科を学ぶ機会を得ることは難しい状況であることが分かる。これらを反映してか生活科の研修会に参加したいと思う卒業生は理科では94%、生活科では65%と大きな差があった。

④自由記述について

多く記述されていたことは、具体的な指導方法である。「実践的な指導の流れ（単元全体あるいは1単位時間）を通して学びたかった、実際の授業を観察する機会がほしかった」などである。おもちゃづくりや町探検など実際に行ったことは役に立っているとのことである。また、それぞれの地域にふさわしい教材開発や飼育栽培が難しいなどの悩みも述べられていた。さらに、評価方法についての記述も複数あり、児童の活動をどのようにとらえ、評価すればよいか困っていることがうかがえる。

V. 研究のまとめと今後の課題

生活科は低学年に限定された教科であるため、生活科を経験していない卒業生も約半数であった。また、研修についても体育が中心となり、生活科を学ぶ機会は極端に少ないと考えられる。昨年度の理科についての研究結果と同様にこうした実態だからこそ大学での講義を充実させる必要がある。自由記述で述べられていたように教科教育法生活において地域に基づいた教材開発の基本的な在り方や単元を通した指導方法などを確実に身に付けられるシラバスを作成する。また、新学習指導要領及びコアカリキュラムにも示されている「主体的・対話的で深い学び」を目指した授業展開や資質・能力の三つの柱を踏まえた教材解釈、ICTを活用した授業の工夫、障害のある児童への指導方法の在り方、生活科の評価の在り方等についても講義に取り入れ、卒業後の職に生かすことができるようにする。なお、生活科の優れた実際の授業を参観させたいが時間的な問題が大きく、それに代わる方策を考えることも課題である。

引用・参考文献

- ・「体育学部出身の小学校教諭の生活科教育に関する資質・能力の現状について ～教員養成課程 生活科教育の方法等の改善に向けて～」体育研究所（平成29年3月）
- ・「学習指導要領解説 生活編」文部科学省（平成20年8月）
- ・「学習指導要領解説 生活編」文部科学省（平成29年6月）
- ・「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」文部科学省（平成28年12月21日）